
J DF

辰巳尚喜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JDF

【Zコード】

Z9149F

【作者名】

辰巳尚喜

【あらすじ】

始発帰りの朝、腹か血を流した外国人に鍵を渡される人物に届けるように頼まれる。村田圭吾。平穀な日々から創造できない一日が始まる。鍵はいったい? 果たして、村田圭吾の運命はいかに・・・

ラッキー・アンラッキー

寒さが少しは感じられる朝だった。日中は上着を着ていると暑いと感じるが、さすがに始発が走る頃は上着を着ていてよかつたと圭吾は思っていた。

いつもの様に始発に乗って家路に向かっていた。

11月1日ともなればポケットに手をいれて前かがみに歩くよつになつてゐる自分がやけに寂しい男の様に思えた。

村田はあぐびをしながら明日からの三連休をどうするか考えていた。

早朝の町は人とすれ違つ事もなく、ひつそり静まつた建物が不気味に思える感覚が家路向かう足を速めていた。

いつもの様にフィットネスクラブの建物に差し掛かった時だった。

地面に点々と血の様な跡が現れた。

何だか気持ち悪いと思いながら、その跡の先に視線を向けた。

村田は元来、臆病だがその反面、好奇心は旺盛だった。

朝の5時半とはいえ、まだ辺りは暗闇に包まれているその中に点々と続く血の跡らしき赤い跡は恐怖感を超えた好奇心を生んでいた。

フィットネスクラブの地下駐車場へと向かうスロープの方にその跡は続いている。

村田は恐る恐るそつちに身体を向けた。

「うわあ！」

思わず声を上げた。

村田の視線の先には人らしきものが座り込んでいた。
恐る恐る近付き声をかけてみた。

「大丈夫ですか？」

近寄ったその人らしきものはあきらかに人でそれも外国人の様だった。

50前後だろうか？スーツ姿で頭には少し白い物が混じっているよう見えた。

「うう…」

脇腹辺りから血が流れている。

「救急車呼びましょうか」

外国人らしき男の容態はかなり悪いように見えた。

「これを…」

男はポケットから何かの鍵らしき物を村田に差し出した。

あまりの事態に村田は混乱していた。

「えつー・どうしたら？」

差し出された鍵を受け取ってしまったものの、どうしたらいいのかわからなかつた。

「ケンザキ ハルカ」

外国人はそう言つた

「ケンザキ?」

ぽつりぽつりと発する言葉に聞き耳をたてた。

「ワタシのナマハはジョフ ドーソン」

村田は発する言葉を反復しながら聞いていた。

「ソノ キーノナカノモノ?…」

「中の物をケンザキと言つ人に届けたらいいんですか?」

そのジョフードーソンと名乗る男は村田に何かを託すように話しぶつけた。

「トウキョー…ヤツリコマニ」

混乱を深めていた。

ジグソーパズルのピースを合わせるかのように、ジョフードーソンの言葉をつなげていた。

「とりあえず救急車呼びますね。」

携帯を取り出した村田を制した手には予想外の力があった。

「タノム、ブジートドケテ クレ」

ジョフードーソンの目力に村田は頷く事しか許されない感覚に襲われた。

「キミハ?」

「村田、村田圭吾です」

ジョフードーソンは何かを差し出した。

「コノデアイはラッキー オアアンラッキー カハキミシダイダ」

差し出されたのは財布だった。

「ハヤク! ヤツラーミツカルマエニ イクンダ」

鋭い目力に何も言えず、村田はその場から立ち去るしかなかつた。

何も考えず全力で走つた。

家まで700mあまり、無我夢中だった。

誰かに着けられてないか確認して家に入った。

さっきまで寒いと縮こまっていた身体から湯気が出るほどで、息はあがり、鼓動はマックスだった。

運動不足の28歳には当然の状態だった。

部屋に入りベットに腰をかけタバコに火を点けようとしたが、驚くほど手が震えていた。

緊張をほぐすためのタバコがそれを余計に確認する結果になった。遠くで聞こえるサイレンの音がさつきのあの外国人を思いだせる。

誰かが連絡して救急車が来たのか、それともパトカーが来たのか。

サイレンの音に敏感になる自分が嫌になり、ベットに入り布団を頭からかぶつた。

夢〇「現実

2

9時10分

目が覚めた。まるで悪夢を見た後の様に疲れた感覺だつた。

いや、悪夢であつて欲しいと願つた。

だがそれははかない願いだつた。

テーブルの上には鍵と財布

ジエフドーソンと言つ外国人から預かつた物

村田は頭を整理していた。

ケンザキハルカと言う人に届ける

ヤツラより先に！

鍵。コインロッカーの鍵のようだつた。

N O 1 1 1

一体何処のコインロッカーなんだ？

村田は財布の中を調べた。

中身は一万円札が88枚と千円札が4枚に米ドルが少しあつた。

その他には何も無かつた。

N0111 それだけの数のコインロッカーがあるとすれば三宮か
新神戸だろ。

村田は意を決して鍵を手に取った。

家から駅までの道のり、今朝全力で走った道のりだ。

村田は歩みを進めるたびに心臓の鼓動が早くなるのを感じていた。

もつすべ、ジェフードーソンが倒れていたフィットネスクラブだ。

事件になつていれば何だかの痕跡があるはずだ。

村田はあえて反対の歩道を歩いた。

フィットネスクラブは何も無かつたかの様に営業していた。今朝の場所、地下駐車場へのスロープには普通に車が吸い込まれていく。混乱していた。ジェフードーソンはいつたいどうした。あの状態では自力で動く事は出来なかつたはず。

ヤツラと言つてた者が連れ去つたか、仲間が助けにきたか？

いずれにせよ、今朝の痕跡は何も無かつた。

あれだけあつた血の跡も皆無だった。

村田の混乱は加速していた。

臆病より好奇心が勝つた。

鍵を開け中身を見たい。

村田は二宮へ向かつため阪急六甲の駅へと急いだ。

連休初日の中宮は混んでいた。村田は思い付くコインロッカーの場所に足を向けた。

『NO111』があり、尚且つ使用中のコインロッカー
一ヶ所は空振り、NOは55までしかなかった。

二ヶ所目、三ヶ所目と鍵は合わなかつた。

思い付く場所を回つたが該当するコインロッカーはなかつた。

二宮を諦め新神戸に移動しようと地下鉄に足を向けた。

時折、「ヤツラ」と言ひ言葉が気になり、周りを気にしたりしたが、何者かもわからないのにその行為は村田を挙動不審にするけだつた。

地下鉄に向かつ階段を下りた時にコインロッカーを見つけた。

明らかに数は少なくむだ足になるとは思ひながら『NO111』をさがした。

「あつた！」

ほんの20個ほどコインロッカーだったのにその中に探していたNOがあった。

村田は例の鍵を出し、コインロッカーの鍵穴に差し込み回した。

力チャヤ！

「開いた！」

奇跡のようだつた。村田は恐る恐る扉を開けた。

中には、セカンドバックが入つていた。

辺りを気にしつつ、バックを取り出しその場から離れた。

臆病〇好奇心

村田は興奮気味だった。

バックの中を早く見たかった。

一人でこつそり見れる場所を探していた。

ヒトゴミを掻き分けて、村田はインター ネットカフェにはいった。
整然と並ぶ個室の一つに入るとはやる気持ちを抑え切れず、バックのチャックに手を伸ばした。

二力所あるチャックの一つをゆっくり開けた。

中には茶封筒が入っていた。

村田の手は微かに震えていた。

まず目に入ったのは、帯封がされた札束が2つ！

思わず生唾を飲んだ。

次にUSBが一つ、写真が一枚

写真は30前後の女性だった。

そして反対側のチャックを開ける。

一瞬大きな声がでそうになつたのを村田は堪えた。

「マジかよ」

バックの中には無造作に入れられた黒く光る拳銃があつた。

その銃が何て種類かは村田には解らなかつたがオートマチックであることと以外に小ぶりだと思いながら、眺めていた。

とつたの判断で触つてはいけないと感じて何も見なかつたかの様にチャックを閉めた。

村田は思い返して、札束とUSBと写真を眺めた。

写真の女性はおそらく『ケンザキハルカ』

そしてUSBが届けるべき物

じゃあ札束は何だ？着手金かジェフードーソン個人の金か、それともこの金も届け物か？

混乱、恐怖、好奇心が入り交じつていた。

村田はパソコンに向かい『ケンザキハルカ』を検索キーワードの欄に打ち込んだ。

以外にヒット数は多かつた。

上から順に開けていく。

何処かの大学の名簿やら懸賞の当選やらと次々に出て来る。

何件目かを開けた時だつた。

「いや

村田は思わず声をあげた。
画面に写し出されたのは、最近有名な空間デザイナーのホームページ

その中に検崎春香の名前と写真があつた。

今話題の空間デザイナー検崎順平の妻であり、会社の社長でもある、いわゆる勝ち組だ！

事務所は代官山、自宅も代官山にあるようだ、自らの自宅や事務所のデザインを誇らしげに載せていた。

村田はそのページをプリントアウトした。

どうしてそう思つかは解らなかつたが、検崎春香にじSBを届けようと思つた。

期待・不安

連休の新幹線は混んでいた。指定席は埋まっていたが自由席で東京に行く気にもなれずいた。

ジェフードーソンの財布、あれには90万ちかい金が入っていた。

村田は鍵と一緒に渡された物だから使えと言つ事だらうと思い、そこからの金でグリーン席のチケットを買った。

時間は昼の1時を回ったところだった。

新幹線が発車すると、村田はさつきのプリンタアウトした資料を読み返していた。

検崎春香 32歳 双子座フェイリス女子大卒業 卒業後は大手広告代理店に就職、28歳で検崎公平と結婚 その後ケン・デザインの社長になった。

何とも順風満帆な人生だと村田は鼻で笑った。

自分は高卒で、今は小さなバーの雇われ店長

天と地ほどの差がある。

村田は資料を置き、ジェフードーソンの財布をもう一度調べた。

中はやはり金しか入ってなかつた。

さすがにバックを見るのはやめた。

中に銃が入っている事に気がついたからだった。

村田は大きくため息をついて目を閉じた。

ジョフードーソンが言った、「ラッキーかアンラッキーかは君しだいだ」

何度も頭の中で回っていた。

東京駅はじつた返していた。うんざりするほどの人に対面は戦意喪失気味だった。

気を取り直しケンデザインに電話を入れようと思つていた。
三連休で居ない可能性は高かつたが、そこ以外の連絡先はわからない。

最悪は自宅を探し出して訪ねるしかないと想つていた。

電話のコールは3回目だった。

「はい、ケンデザインです。」

女性の声だった。

「すいません、検崎春香さんをお願いします」

「失礼ですが？」

「ジョフードーソンの代理の者です」

村田は迷いなくジン・フグーンの名前をだした。

「ハロー、会社にかけてくるなんてどうぞう事一。」

「どうやらこの女性が検崎春香のようだった。写真のイメージと違い、少し声が低いと思っていた。」

「いや、私はジン・フグーンではないのです。村田と言つて下さい。」

「どうぞう事?」

村田は今までのことを話した。

「なるほど、あなたは今何処にいるの?」

「東京駅です。」

検崎春香は品川のホテルで待ち合わせようとして、お互いの携帯番号を教えた。

「つうは?」

「あります。」

村田はカネの事は聞かないのかと思い、同時にラッキーかもと思つた。

電話を切ると人込みを書き分け、山手線のホームに向かつた。

この人込みでは例えつけられていてもわからないと思いながら、周

りの人達をインプットしていた。

仕事柄、人の顔を覚えるのは得意だった。

村田が今のお店を任せられるようになったのも、記憶力のよさでお客の顔と名前と好みを瞬時に覚える事が要因になった。

怪しい奴。そう思えばみんなそう見えるし、そうでないと思えばみんなそうだ。

品川駅につくと大量の人と一緒に押し出された。

目的のホテルは駅からすぐ、検崎春香かが代官山からくるにはまだ少し時間がある。

急に反転した。もし、誰かがつけていればおかしな動きになるはずだ。

周りに注意をはらいなが歩いた。

村田が思つほどわからず、また反転してホテルを目指した。

女○「男

ホテルを前に村田は色々チェックした。

何処に何があるか、特に出入り口が何箇所あり、それが何処に繋がっているのか。

ホテルに入るとやはり人が多く感じられた。

待ち合わせのティーラウンジはすぐに確認できた。

村田はあえてロビーカウンターでさつき確認したホテル内にある鉄板焼きの店の場所を聞いた。

ここに居る事を怪しまれない為に考えた事だった。

村田は携帯を取り出し、かけるふりをしようとした時に電話が鳴つた。

「もしもし」

「JRD、もうホテルに着いてる?」

「今、ロビーにいます」

「私もラウンジにいるけど、事態が変わったわ。どうやら着けられてみたい?」

村田は生睡を飲んだ。やはり危険があると感じた。

「私の事が確認出来る?」
ラウンジに視線を向けた。

オープンになつたティーラウンジの入口付近に写真で見た検崎春香
が濃紺のスーツでいた。

「確認しました。入口から二つのテーブルですね。」

「そお、あなたは?」

「ロビーカウンターの前です。ジーンズに黒っぽいジャケットです。」

「私も確認できたわ、以外に男前ね」

今の状況では礼を言つ氣にもなれなかつた。

「私の斜め向かいのテーブルに男が一人居るのがわかる。黒のストライプのスーツと濃紺のスーツ」

村田はチラ見して確認した。ストライプは細身の男前、濃紺は四角い顔の柔道体型

「その二人に間違いないんですか?」

「間違ひはないと思うわ」

検崎春香は地下の駐車場に向かつからそのエレベーターで渡す用に
言った。

村田は了解し、一旦手洗水に足を向けた。

行く。戻る

村田が手洗水から出て来ると検崎春香はレジで精算をしていた。

エレベーターに向かいながら持参したクロブチの眼鏡を掛けた。

村田は眼鏡マニアだからずー、三個の眼鏡をもつていた。

エレベーターの前に立ち、階下へのボタンを押した。

そのすぐ後ろに検崎春香が来たのを確認したと同時に磨かれたエレベーターの扉にストライプの男前が立った。

一瞬ひやりとした時にエレベーターの扉が開いた。

村田が初めに乗り込み、B2のボタンを押して一番奥に行つた。

その後に検崎春香が左前に入り、最後にストライプが右前に陣取つた。

1階から地下2階までの間色々考えていた。

村田の心拍数は跳ね上がり、周りの二人に音が聞こえのでは無いかと心配していた。

地下2階に着く寸前に村田の携帯が鳴った。

心臓が止まるくらい驚いたが、何も無かつた用に電話に出た。

「もしもし」

相手はお店の常連客だった。

村田はこれを幸いに普通に会話をした。

エレベーターの扉は開き、検崎春香が先に出た。ストライプが村田に先に出る用に進め、開のボタンを押していた。

軽く会釈して先に出るとエレベーター横にあつた灰皿の所に向かつた。

検崎春香は真っすぐ車に向かつて行く。

村田はたわいもない会話を続けていた。

「今、品川にいるんですよ。あつ、すいません」

ストライプは検崎春香の後方をゆっくり歩いていく。
「わかりました。正面口ですね。今から行きます。今、地下の駐車場にいますから」

村田の機転だつた。電話はどうに切れていた。

検崎春香が今の会話に反応して出て來るのにかけるしかなかつた。

さつき色々確認した時に地下駐車場の出口が正面口のすぐ横にあるのを知つていた。

車は赤のBMWだつた。

エレベーターの階上のボタンを押した。

後ろで車のドアの閉まる音が2つした。

一つは検崎春香のBMW、もう一つはストライプの車の物エレベーターが着いて扉が開いた瞬間、中から柔道体型が出てきた。村田は何もないかの」とく入れ代わりにエレベーターの中へ

その瞬間BMWのエンジンがかかる音がした。

その近くにあったマークXにストライプの姿がみえた。

エレベーターで一階に上がり正面口を出て駐車場の出口に向かつ。

時間的には村田の方が少し早いと思つていた。

エレベーターの扉が上がり開いた瞬間に飛び出し、正面口へと急いだ。

正面口を出た時、一瞬ひやりとした空気が身体を包んだ。

正面口付近は混み合っていた。時間は夕方の5時前

車の出入りも多くなつている。

村田はクロブチ眼鏡から茶色いレンズのサングラスに架け替えた。

駐車場の出口付近に着いた時、地下から車の出て来る音がした。

程なく赤いBMWが見えた。

検崎春香も村田を確認したようだつた。

BMWが出てきた瞬間に村田は後部座席に雪崩こんだ。

安堵〇不安

「機転がきくのね。」

検崎春香がバックミラーにいった。

「ラッキーが重なつただけだよ」

村田は後部座席で身体を低くしたまま答えた。

「といふで、USBは？」

村田はポケットから取り出し、アームレストに置いた。

「今、何処へ向かってる？」

「とりあえず渋谷方面にむかってるわ」

「何でもいいからドライブスルー見つけたら入ってくれ、そこで降りる

「なるほどね、さすが」ロ

「俺は」ロじゃない！村田だよ」

ハイハイとばかりに検崎春香は笑っていた。

「右手にドライブスルーを見つけたわ

そう言つと車を向けた。

夕方の幹線道路は混んでいた。

「奴らの車は？」

「通り過ぎたわ。」

車はゆづくりドライブスルーの建物の中に入った。

「じゃあ、これで！」

「中身の確認が出来たら連絡します。」

「お好きに、今晚は都内にいますから。」

赤いBMWは何も注文しないまま走り出した。

村田は店内に向かい、朝から何も食べていない胃袋を満たすためにハンバーガーを注文した。

ジョフードーソンなる外国人に会つてからまだ、12時間ほどだが、驚くほど激動な一日だったと思い返していた。

三富のロッカーで見つけた物は東京駅に着いた時に同じ様にロッカーに預けた。

これで終わり、そう思つていた。

何とかホテルの予約が取れた。場所は新橋。

小さなビジネスホテルだった。

村田は部屋に入るとそのままベットに大の字に倒れ込んだ。

朝からの色々は肉体と精神の両方を疲れさせた。

すぐに意識を失い眠りに入った。

村田は夢を見ていた。

今日の出来事を復習するかの如く、ジョン・フードー・ソン、USB、検崎春香、ストライプのハンサム、柔道体型など次々に現れた。何故だか行動的だったし、かなりいつも立ち回れた。夢の中に死んだ父親がしてきた。

5年前、海外出張中に飛行機事故で死んでいた。

「圭吾、お前ならやれるよ。俺の息子だからな」

村田は夢は携帯の呼び出し音で終わつた。

「もしもし」

「もしもし、いや村田さん？」

検崎春香だった。何だか焦つている。

「奴らが事務所にやつてきてＵＳＢを奪つていったの」

「それで？」

「それでつて！あなた、あれがないと困るのよー。」

村田は冷静だった。届けてしまえば自分の役目は終わりだと思つているのと理由はもう一つあった。

「私は届けて確認されれば仕事は終わりです。」

「や、それはそうだけど…」

検崎春香は言葉に詰まっていた。

「今事務所ですか？」

「そうだけど」

「一時間後に伺います」

「どういつ事？」

「つうB要るんでしょ」

「有るの？」

困惑する検崎春香を無視して電話をきつた。

ジャケットを羽織り、村田はホテルの部屋を飛び出した。

嘘○「眞実

電話からちょうど一時間後だった。

ケンデザインの前に村田はいた。

検崎春香からの電話の後、東京駅に行き、一度と手にしない予定だったセカンドバックを手にした。。

時間は夜の10時を回っていた。

タクシーの窓からは連休を楽しむ人達が見えていた。
代官山の人通りが切れた頃、斬新なデザインの五階建てのビルが見えた。

ケンデザインの扉は開いていた。

村田は細心の注意を払いながら中に入った。

「時間ピッタリね」

奥のデスクから検崎春香が声をかけてきた。

「お届け物ですよ」

「い」苦勞様」

男の声と共に例の二人組が姿を表した。

村田は検崎春香を睨んだ

「渡して貰おうか！」

ストライプが村田に銃を向けて言った。

「物騒ですね、ＵＳＢはその人から奪つたんでしょう」

村田は強気の発言をした。

「なかなかいい度胸だ小僧！あのＵＳＢには「ローパー」されたあとがあるんだよーお前もつてるだろ」

ストライプは声をあらげた。

村田は少し驚いた顔をした。それは声をあらげられた事にではなく、「ローパー」した事がばれた事にだつた。

「ありますよ。ここにー。」

村田はセカンドバックを叩いて見せた。

「早く渡せー！」

わかつたとばかりに村田はセカンドバックのチャックに手をかけた。

そこからの行動は

村田自身も驚くほど素早かつた。

セカンドバックから右手で銃を取りだしストライプに向け、左手でモバイルＰＣを出した。

「おっと、動かないでくださいね。このＰＣは今ネットに繋がって

ます。それもファイル共有ソフトつてやつにね

村田は左手のPCの画面を見せた。それにはUSBもしつかり刺さつていた。

「小僧、テメエ！」

柔道体型がいきり立つた。

「やめろ！」

ストライプが制しする

「悪いけど、二人がここから出でいくか、俺とその人が出でいくかなんだけど」

ストライプの舌打ちが聞こえた。

ここまで大胆な事をしたわりには、この後は村田自身ノープランだった。

「どうします？ Enter Key一発で情報は流れますよ

ストライプは顔色一つ変えない。

村田の身体は汗でびっしょりだった。

大胆な発言と行動のわりに緊張はかなりのものだった。

「わかつたよ、この女と交換だ。」

ストライプが柔道体型に指示を出す。

銃を突き付けられたまま、検崎春香が村田に向かってゆっくり歩いてくる。

自然と村田の銃を持つ指にも力が入った。

ストライプの視線、柔道体型の動き、意識を集中させていた。

検崎春香が目の前まで来た。柔道体型の荒い鼻息が聞こえる。

心臓の鼓動はマックスだった。

どう出て来る？ そしてどうする？

村田は考えていた。

「そこまでだ！」

村田は驚きを隠せなかつた。

声とともに現れたのは、今朝腹から血を流して座り込んでいたジェフ・ドーソンと名乗つた男だつた。

「何あんたが…」

一気に周り奴らの緊張がほぐれた感じがした。

「圭吾、合格だよ」

村田は意味がわからず呆然としていた。

「とりあえず、物騒な物を下ろせ、とは言つても撃つた所で空砲だがね」

「どういふ事だ！」

ジエフドーソンはゆっくりと村田に近付き話し始めた。

「改めて自己紹介しよう。私はガイヤバロック
彼等は我々のメンバーだ」
「メンバー？」

「我々はジエフドーソンズファミリーと言つ組織の一員だ！」

話しながらガイヤバロックと名乗った男は一枚の写真を見せた。

その写真にはここに居る村田以外全員が写っていた。

「親父！」

村田は思わず声をあげた！写真にはみんなの真ん中で笑う村田大悟、
村田の死んだ父親が写っていた。

「何で親父が！」

村田はガイヤバロックに詰め寄った。

「我々JDSは世界規模の秘密組織だ。重要な情報を運ぶ運び屋と
言った所だ」

村田は写真を眺め続けていた。

「私はガイヤバロックコードネームは、G、極東のリーダーだ。そして検崎春香、H、そして彼が須藤正一、S、もう一人が田所栄治、E、だ」

ストライプが、S、で柔道体型が、E、と言われた。

「そして君の父親、村田大悟、D、は我々の仲間だった。5年前の不慮の事故でなくなるまでは」

村田はガイヤバロックの発する言葉がまるで小説でも読んでいるかの様に聞こえていた。

「圭吾、我々はずっと君を見守っていた。D、の死後忘れ形見を大事にな」

彼等の意図を探っていた。

何が目的なのか？どうしてこんな事をしたのか？

「我々は新しいメンバーを捜していた。そしてやはり君が一番の候補になつた。D、の遺伝子を受け継ぐ、K、にな」

「どうして俺なんだ。」

村田は囁み付いた。

「お前、D、いや父親に知らず知らずに教育されていたんだよ。」

まったく意味がわからない感じだつた。知らず知らずに教育されて

いたと言われても何とも言えない感じだった。

村田の混乱は続けていた。

過去〇〇未来

「どう? 私と一緒にやらない? あなたは才能あるわよ」

Hが笑顔で言つ。

「心配しなくていいぞ」

入り口に突然現われたのは剣崎順平だった。

「あなたもメンバーなんですか?」

「そうだ、Dの亡き後は私がメンバーを束ねている」

空間デザイナーと言つのは隠れ蓑だった。

剣崎順平と剣崎春香は世間的には誰もつらやむ夫婦

しかし、その実態はJDFのメンバーで一人は夫婦ではなかつた。

村田の驚きは続いていた。

「一緒にやるぜ!」

Eが肩を両手で掴んで力強く言つ。

「違う人生も悪くないぜ」

Sがニヒルに笑いながら言つた。

「圭吾、私たちとやつてみないか？危険はあるがスリリングな人生になるぞ！」

Gが鋭い眼光で言う

村田は悩んでいた。臆病と好奇心の間でゆれていた。

「本当に俺で大丈夫なのか？」

全員が笑顔で頷いた。

今自分を考えていた。毎日夕方から朝までバー・テンドーとして働く、それはそれで楽しくもあつたが、何だか満たされない日々だった。

今日一日はスリリングだった。こんなに頭を使った事はこの所なかつた。

何か違う自分になりたかった。

「わかった、やろう」

全員が安堵の表情になり村田に駆け寄った。

「今日からお前は、K、だ頼んだぞ」

村田圭吾の人生が変わった瞬間だった。

知らず知らずに父親に催眠学習されていたようだつた。

身についたJDFのメンバーとしての対処方法

圭吾の父、大吾はJDFのメンバーのリーダーとして長くやつきていた。

その忘れ形見の圭吾には、生まれながらの運命があった。

そして彼がこれから世界の重要な情報を運ぶことになる。

JDF、常に情報は巡っている。

荷物 野心

村田圭吾はカウンターに座り新聞を広げていた。

あのジョーフードーソンとの出会いからヶ月が経つた。

その後、JDSのメンバーになり特別な訓練を受けた後、新神戸近くに小さなバーを開店した。

もちろんJDSの資金だ。

何故、新神戸なのか？理由は簡単！新幹線にすぐに飛び乗れる様にだ。

実際、バーの営業は隠れみのに過ぎなかつた。

場所がら、やほど忙しくなく、道楽でやつていて思われていた。

時折休むのも趣味の写真を撮りに行つてゐる事になつてゐる。

「まいど、お配便です。」

「い」苦勞様

村田はいつものように伝票にサインをした。

小さな箱を受け取るとすぐに空けた。

中にはクリスタルのロックグラスが一個とJDSカードが一枚。

いつも様に携帯にカードを差し込み情報を呼び出した。

「おはよー、Ｋ。またお仕事です。」

‘Ｈ’事、検崎春香の画像が流れ、今回の仕事の内容が話された。

仕事の依頼はいつもこんな感じだ。

今回の贈り主は在阪の与党衆議院議員の大物塩田義信の第一秘書和山武

受取人は同じく衆議院の尾山三郎の第一秘書山根章

尾山は野党の大物。

荷物はＳＤカード

中身は安易に想像がつく。

世に出ては困る塩田の情報。秘書が敵陣に売った。

‘和山には探偵が張り付いているから慎重にようじく。じゃ、東京で’

村田は近畿圏と中国、四国の一帯の担当。

受け渡しも巧妙に練られている。

全てを確認して携帯を閉じた。

荷物 野心2

6月10日贈り主から荷物を受け取る日

場所は新大阪駅構内にある本屋。

受け取る方法はその店の本にSDカードを挟んで入れる。

本のタイトルは「腐敗政治」まさにうつてつけだ。

11時ジャストに村田は駅構内の喫煙場所にいた。

そこから本屋に入る人は確認できた。

スーツ姿の人がさすがに多く、慎重に行き交う人を見ていた。

その村田自身もスーツに身を包んでいた。

程なくデータで確認した写真の和山武が現れた。

政治家の秘書らしく、きつちりとした身なりをしていた。

和山は目的の本屋に入つて行く。

村田もゆっくりと歩きだした。

多くの人が行き交う中、明らかに和山を意識している男を見つけた。

一見、普通のサラリーマンに見える30代

明らかに和山を見張っている。

こいつがHが言っていた探偵かと思い注意を払った。

村田は和山が確認できる場所で雑誌に手を伸ばし、周りに気を配つた。

和山との距離は数メートル、例の探偵は外から和山の様子を伺っている。

「腐敗政治」を手に取り読んでいる和山。

SDカードを挟むタイミングを狙つてているのだらう。

村田は探偵から和山が死角になる位置に立つた。

次の瞬間、和山は本を閉じ、本棚に戻した。

村田は場所を移動して、和山の動きをおつた。

雑誌を一冊手に取るとレジで精算を済ませ出て行つた。

それを見届けてから、SDのピックアップしに移動した。

村田は他の本と「腐敗政治」を手に取りSDを抜き取つた。

荷物 野心3

新幹線の出発まで、村田は喫茶店に入る事にした。

ガラス張りのカウンターに座り、コーヒーを注文した。
受け取ったSDをいつもの様に端末機でコピーした。
改札の前に和山が見える。腕時計を見ながら出発を確認している様子だった。

その近くに探偵もいた。

村田は探偵の写真を隠し撮りした。

「荷物は受け取った。今から田的地區にむかう。異物確認願う」

村田はHにメールを送った。さつきの写真を添えて。
程なく返信がきた。

「H苦労様です。先方には連絡済みです。お尋ねの件は以下です。」

Hの早い対応だった。

探偵は中村俊哉31歳、廣田興信所の人間

廣田興信所はかなり有名な興信所だった。テレビなどでもちょくちょく見る事があった。

和山が改札に入つていった。後を追う様に中村も改札に向かつた。

村田は慌てる必要もなく、ゆっくりしていた。

荷物を受け取った時点でそれ以外は関係ない所だった。あとは無事受取人に渡せれば問題はなかつた。

新幹線に乗り込むと村田はいつも席に着いた。

チケットは決まってグリーン車進行方向に向かつ左側最後列の2席だつた。

必ず一人でも2席だつた。

村田は通路側に腰を下ろし、車内を確認した。

和山は進行方向左側一番前、中村はその5例後方右側
村田は特に気にする事なく、さつき買った「腐敗政治」を読み始めた。

今の政治と政治家のダメっぷりを延々と書いていた。
いくらほざいても変わらない事柄ばかりだつた。

村田は読むのに飽き、車内販売の弁当を買つた。

塩田義信は人民党の重鎮、次の総理候補だ。

一方の尾山三郎は民各党の代表。

政権が交代すればこちらも総理候補

暗躍する足の引っ張り合い。

村田は無事に荷物が運べればいいと思っていた。

新幹線の間はこれと書いて何もなかつた。

和山が何度か携帯で話しにグリーン車から出ただけだつた。

村田は品川で下りるつもりで準備を始めた。

車内が幾分慌ただしい空氣になり、新幹線は品川に到達した。

和山も中村も動かない。奴らは東京までだらう。

品川で降りると村田はタクシー乗り場に向かつた。

政治家1

代官山に来るのは一月ぶりだった。

ケンデザインはJDFの隠れアジト

村田は何食わぬ顔で事務所に入った。

怪しまれる心配は無かった。村田の神戸のバー「Runner」はケンデザインが手掛けた作品。

何事にも抜かりはない。村田の父、村田大悟からの繋がりもある。

「お疲れ様です」

事務所に入るとスタッフが声をかけてきた。

ケンデザインには女性2名男性2名のスタッフがいる。

彼らは全員JDFのメンバー。表向きはケンデザインのスタッフしかしながら、実はJDFのサポートメンバー

村田達コードネームのある人間はS級Runner

コードネームの無い人間はサブだった。

「受け渡し方法は」

村田は挨拶もおざなりに、奥のデスクのHにいった。

「今晚、赤坂の料亭 水谷で受け渡しよ。」

Hはパソコンのモニターから田を離さずに言った

「俺が一緒に水谷に行く」

奥からっここと、検崎順平が現れた。

受け渡しは料亭、水谷に」と行き、尾山達一行が到着したら渡す。

9時30分に手洗いで。

「尾山達はそこで中身を確認して日が変わるまでにマスコミにリークする。明日朝は大騒ぎって訳ね。料亭内で全て終了。誰にも気付かれずに行」

料亭 水谷は政財界の御用達密会場所

超高級な店だ。

二年前にケン・デザインはこの改装を手掛けている。
だから高級料亭に安易に出入りができる。

「我々の予約は8時、奴らは9時。ゆっくり料理が楽しめる

Jが笑顔で言った。検崎順平、Hの旦那に表向きはなつていて、これもJDFの隠れみの。

二人はあかの他人だつた。

「サポートはナツとキヨウがつくわ。」

ナツ、Hの実の妹吉原夏美

キヨウは河井恭平、二人とも20代半ばのサポートメンバー

「時間まで写真でも撮つてくるわ、なんせ趣味の写真を撮る為に店休んでるからな」

そう言つて村田は出口に向かつた。

バーのマスターで趣味は写真。月に何度か店を休んで写真を撮りに行く。表向きは。

8時5分前に料亭 水谷に着いた。

赤坂の街中でんと構える重厚な門

Hが運転のBMWは車寄せで止まつた。

「いらっしゃいませ、ようこそお越しくださいました。検崎先生」

すぐに中から高そうな着物に身を覆つた女将が番頭と仲居を従えて現れた。

「女将さんお世話になります。」

Jは爽やかに笑顔で挨拶をした。

日本庭園がよく手入れされている、

長くよく磨かれた廊下を案内されながら、村田は場所の確認をしていた。

村田達の通された部屋は奥から三つ田の鞍馬の間

尾山たちは一番奥の金閣の間だった。

Jと女将が世間話をしながら、酒の注文をしている間村田は庭を見ていた。

感動すら覚える庭を眺めながら色々な確認はおこした。なかつた。

「では、すぐにお持ちしますね。」

女将はやつぱりと部屋をでた。

「いい庭だつた。」

「が自慢げに言つた。」

JDFの幹部でありながら、デザイナーとしての才能は本物だった。

「へはへつり一本の方が多いんじゃないの？」

「ヤコッ」と笑うと村田に座る様に示した。

運ばれてくる料理を食べながら、尾山達が来るのを待つた。

その間二人はあくまで、店舗デザインの打ち合わせをしている振りをしていた。

Hからメールが入った。予定の時間の少し前

その後、廊下を歩く足音が聞こえた。

順番に足音が聞こえ10人くらいの人気が金閣の間へと消えていった。

「K、そろそろ準備だな」

Jの言葉に頷き、SDカードを確認した。

受け渡しはトイレ

Kが先に行き、ペーパーホルダーの中に隠す。

それを山根が受け取る手筈になつていてる。

時計を見ながらその時間を待つていた。

「では、トイレに行つてくれる」

村田が席を立ち、庄子に手をかけた瞬間、Jの携帯と村田の携帯ともにメールが入った。

「Kー停止だ！」

Hからの緊急メール。

予想外の人物が現れた。

塩田だった。

すぐにドタドタと足音が聞こえた。

Jが盗聴機のスイッチを入れる。

「キサマいら向をたくらんじるー。」

部屋に入るなり塩田が声をあらげた。

「いつたい何ですか塩田先生」

尾山が冷静に返す。

押し問答は続いた。塩田は尾山達の画策に気付いていたようだが、まだ、その真意にはたどり着けてはいないうだつた。

時間が過ぎていく、村田達も何時までもここに留まる訳にはいかなかつた。

山根も今の状態では身動きが取れないだらう。

村田達は一回店を出てからプランを変更する所とした。

ヒミツトまではまだ少しある。

「『ひそひそひそひ』まででした。また伺います。」

Ｊが女将と挨拶をしている。

村田は工の運転する車に乗りこんだ。

「どうする？」

「塩田の登場は予想外だったわね」

Ｊが乗り込み車は発進した。

「とつあえず車を変えるわね。」

「ナツは何処にいる？」

「予定通り向かいのバーナツ屋にいるわ

近くの地下駐車場にキョウガマークXで待っていた。

「少し様子を見よう。最悪、俺はもう一度戻れるから

Ｊは戻りやすいのは確かだが、危険も大きいと村田は思った。

「俺とキョウは近くで待つ

村田はそつとマークXに乗り込んだ。

「回線はオープンにしておいて」

タイムリミットは1~2時だった。

尾山達は情報を確認し、その場でマスクを脱ぐ。

料亭と言ひ密室で全てが終わる。

「かなり塩田は怒鳴つてますね」

キョウガ、盗聴を聞きながら言った。

水谷には巧妙に盗聴機が仕掛けられている。

村田のマークXは水谷が見える路上で待機していた。
ナツからの無線が入った。

「水谷の正面右側に廣田興信所の車が一台いるわね。レクサスとオ
デッセイ」

「一台はすぐに確認できた。

用心しなければいけない。奴らに気付かられるのはまずい。

とりあえず塩田が帰らなければ動きがとれない。

中には塩田達、表には探偵

下手に動く事は命とりだ。

「K、俺がもう一度戻る
Jがいらっしゃったように言つ。

「塩田が出ない事には戻つてもしかたがないだらう。それにJが行

くのは危険だ

村田には考えがあつた。

一時間ほどして塙田が出てきた。散々怒鳴り散らしたが、尾山に軽くあしらわれたようだった。

黒塗りのベンツが水谷から出て来た。

同時に探偵のレクサスも動き出す。

オデッセイは見張りの様だった。

「キョウ、バルーンは有か?」

「なるほど、準備します」

キョウは村田の意図をわかつたようだった。

バルーンとはまさしき風船の事だった。

風船に荷物を付ける。小さい物なら何の問題もない。風船と言つても、ただの風船ではない、遠隔操作が出来る様になっている。

JDFは秘密組織

小道具も色々だ。

「今からナツと合流する」

村田はそう言つと車を降りた。

ナツの居るドーナツ屋は路面に面したガラス張り、その窓際のカウンターにパソコンを広げて座っている。

水谷の真正面、オーテッセイは何かを待つより息を潜めて止まつていふ。

「準備はOKよ、キヨウが指示を待つてるわ」

どう見ても女子大生の暇潰しが見えないナツの隣に座つた。

パソコンの画面にはカモフラージュ用のポータルサイトが写つていた。

「K、山根には連絡ついたわ、庭に出て貰ひよつて言つたわ。頼むわね」

Hからの連絡を聞いて、ナツに合図をした。

村田は携帯をバルーンの操作用に切り替えた。

「バルーン確認、左から黄色奴」

ナツの言葉と同時に村田の携帯にバルーンからの映像が写し出された。

「今はほとんど風は無いわ、チャンスね」

ゆっくりと風船は水谷に近づく、あたかも誰かが離した物がゆらゆら漂つているかの様に

慎重にバルーンを操作する。

オデッセイの奴らは全く気にしていないようだった。

黄色の風船から伸びる紐の先にはSDカードがついている。

村田の操作で水谷の庭にゆっくり降下していく。

携帯の画面には風船に取付られた小型カメラの映像が写し出される。

さつきまで眺めていた庭が写しだされる。

庭木に当たらない様に慎重に操作する。

スース姿の山根が写った。

辺りを気にしながらSDカードに手を伸ばす。

山根の手に荷物は渡つた。

「配達完了！」

遠隔操作で風船は割れた。

村田は携帯の画面を元にもどし、ナツはパソコンを閉じた。

「お疲れ様、撤収よろしく」

Hからの連絡で村田とナツは席を立つた。

翌日の朝刊に人民党、塩田議員の今までの悪行が紙面を賑わせていた。

政権交代は必至、尾山は時期総理になるのは確実だろう。

その影にヒロFがいる事は世間は知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9149f/>

JDF

2010年11月22日21時52分発行